# （仮称）高知市未来ビジョン　ベース版

# 計画の全体像

| 構成 | 章 | 主な内容 |
|---|---|---|
| | ・市長メッセージ<br>・計画策定の趣旨 | ・計画に込めた思い等<br>・計画策定の目的、背景等 |
| 理念 | 第１章 高知市の未来像 | 本市が掲げる将来の都市像・理念 |
| 現状認識 | 第２章 高知市の現状 | 統計等の客観的データ、高知市の強み |
| 分野横断的視点<br>施策内容 | 第３章 未来像の実現に向けた施策の展開<br>－６つの「しあわせの柱」と施策－ | 市役所に求められる分野を超えた共通の考え方<br>６つの「しあわせの柱」に分類される施策の内容 |
| 計画の構成等 | 第４章 計画の構成等 | 計画の構成、位置付け、進行管理 |
| | 巻末資料 | 策定経過、参考情報等 |

# 市長メッセージ

完成版ではメッセージを挿入

## 計画策定の趣旨

本市では、2011年３月に「2011高知市総合計画」を策定し、基本構想において「森・里・海と人の環　自由と創造の共生都市高知」を将来の都市像に掲げ、その実現に向けてまちづくりを進めてきました。

このたび、急速に変化する社会・経済情勢に的確に対応できるよう、新たな計画を策定することとしました。新たな計画は、よりわかりやすく、コンパクトな内容とすることとし、また、機動性や柔軟性を重視するため、計画期間を短縮しています。

# 第１章　高知市の未来像

## 未来を起点に今を動かす　「高知市の未来像」

# いま、そして次世代へ ― しあわせを紡ぐまち 高知

**「いま、そして次世代へ」**
高知市がこれまで培ってきた自然、文化、人のつながり、自由な気風といった「高知市らしさ」を次世代へ継承することを表します。

**「しあわせを紡ぐまち」**
市民一人一人の実感を大切にしながら、地域全体で時間をかけて、しあわせを育てていく考え方を表します。

**市民一人一人、それぞれが思う「高知市らしさ」を大切に受け継ぎながら、市民・地域・企業・行政といった様々な主体が、ともに、これからのしあわせを育てていく姿を表現しています。**

この「高知市の未来像」は、私たちが目指すゴールであり、厳しい社会情勢や人口減少という大きな波の中でも、未来から逆算した「今やるべきこと」、「進むべき方向」を示してくれる羅針盤です。現状の課題を積み上げるのではなく、日々の暮らしの中で、市民一人一人がそれぞれの「しあわせ」を実感している理想の姿から、これからの施策や行政運営のあり方を導き出します。

### 目指すしあわせ

しあわせの形は人それぞれです。物質的な豊かさにしあわせを感じる人もいれば、精神的な豊かさや、その土地ならではの暮らしに価値を見出す人もいます。
その人が感じる、その人自身のしあわせを大切にします。

### 行政としての高知市の役割

行政がしあわせの形を決めるのではなく、市民がしあわせを追求できる土壌を整え、お手伝いする役割を担います。

# 第２章　高知市の現状

「高知市の未来像」を実現するためには、まず、私たちが今、どのような位置に立っているのかを正しく知る必要があります。自然や歴史、文化といった地域の特性や、統計的なデータから見える客観的な現状を把握し、本市が持つ他にはない価値や、直面している現実の両面を見つめます。

## 1. 高知市の姿

本市は四国南部のほぼ中央に位置する、土佐の歴史と文化の中心地です。1989年に市政が施行し、以降、幾度かの合併を経ながら、県都として発展してきました。現在、県民人口の半数に近い約30万人（令和８年７月時点）の市民が暮らしています。

北側は山地に囲まれ、南側は太平洋（土佐湾）に面した平野部に都市が形成されており、中山間地域・田園地域・都市部がバランスよく調和したまちです。市内中心部を流れる清流・鏡川や200種近い魚類が確認できる浦戸湾をはじめとした豊かな自然環境を有しています。
また、年間を通じて降水量が多く、気候も温暖で日照時間も長いため、農作物などの生産に有利な気候条件にあります。

食材の供給地として農業が発展し、江戸時代から300年以上続く日曜市をはじめとした街路市には、新鮮で豊富な食材が並び、地産地消の食文化を支えてきました。
豪快な皿鉢料理に代表される「おきゃく」（宴会）、情熱的で創造性豊かな「よさこい祭り」などは、地域独特の文化として発展しました。

また、山内一豊が築き、今も当時の天守が現存する高知城、雄大な太平洋を一望できる桂浜、飲食店などの商店が賑わう「ひろめ市場」なども含め、歴史と自然、食の魅力が巧みに融合した高知の文化は、魅力ある観光資源としても国内外から注目を集めています。

## 2.高知市の強み

市民の皆様との意見交換では、計画策定に関する様々な意見が出されましたが、その中には、統計情報にはない、本市のまちづくりにとってプラスの要素となる市民の価値観や感覚が散りばめられていました。

**市民意見から見出される高知市の「強み」**
・都市機能が比較的集約されているため生活の利便性が高い。
・生活場所と自然環境が近く、時間がゆったり流れていると感じる。
・人のあたたかさや、人間関係の居心地の良さを高く評価する。
・よさこい祭りのコミュニティが人脈形成につながっている。
・食材や飲食店で提供される食事が美味しい。

⇛

都市の便利さと、自然の近さが無理なく共存していることは、高知市の大きな強みであり、このように日常の中で空や川、風の気配を感じられるまちは、そう多くありません。
また、人のあたたかさが、まちの暮らしや交流の心地よさにつながっており、よさこい祭りといったイベントを通じて人と人とのつながりが自然に生まれ、そこから人脈形成にもつながっています。
さらに、こうした人との交流の豊かさに加えて、食材の新鮮さや飲食店の料理のおいしさも、高知市での生活や滞在をより魅力的なものにしていると言えます。
これらの強みを守り、活かしながら、課題を遂行していくことがこれからのまちづくりの基本となります。

## 3.高知市を取り巻く現状

**・人口減少問題**

本市の総人口は306,187人（令和８年７月時点）であり、ピーク時の平成20年（約34万人）から、約３万５千人の人口が減少しており、減少幅は年々増加傾向にあり、近年では年間約4,000人の人口が減少しています。また、こども・若者・働き世代の減少が進展しているのに対し、高齢世代の人口は増加傾向で、単に人口が減少しているだけでなく、労働力不足や地域産業の担い手不足の深刻化にもつながっています。その結果、地域経済の活力低下だけでなく、伝統文化や地域コミュニティの維持にも影を落としており、生活の維持に関わる広範な問題が生じています。

**・気候変動や自然災害への備え**

本市はその地理的特性から、非常に多くの自然災害リスクを抱えた地域であり、南海トラフ地震や豪雨、台風への警戒が不可欠です。特に南海トラフ地震は、今後30年以内に高い確率で発生が予測されています。風水害についても、線状降水帯の発生など、気候変動により激甚化しています。

また、地球温暖化に伴う近年の酷暑は、私たちの健康や日常生活だけでなく、地域を支える農林水産業に対して深刻な打撃を与えています。

これらの気候変動や災害が発生しても、できるだけ影響や被害を抑え、命と生活を守り、つないでいかなければいけません。

## 4.高知市の課題

市民の皆様との意見交換では、計画策定に関する様々な意見が出されましたが、その中には、高知市の課題に関する内容も散りばめられていました。これらを分析していくと、多くの意見が高知市が主な課題と感じている内容に繋がっており、高知市が感じている課題＝市民が実感する課題でもあることがわかります。

**市民意見から見出される高知市の「課題」**

・若者の流出と雇用の少なさ
・住み続けたいと思う環境不足
・交通の不便さ
・買い物・商業施設の不足
・子育てしやすさの不足
・防災・災害への不安
・高齢社会を支える体制
・地域コミュニティ・担い手不足
・都市の魅力発信・プロモーション不足

⇛

仕事の少なさや給与の低さ、交通の不便さ、買い物や遊ぶ場所の不足、子育ての負担といった意見は、市民の暮らしやすさに直結しています。こうした問題が解決されなければ、特に若い世代の県外流出が進み、人口減少がさらに進んでしまいます。つまり、日常の不便さや将来への不安は、そのまま人口減少の大きな原因になっているとも言えます。

また、南海トラフ地震への不安や災害後の生活再建への心配も多く出されました。防災が不十分であれば、住民だけでなく企業も高知にとどまりにくくなり、人口減少や地域の弱体化につながります。

このように、意見交換会で出された意見は、個別の課題のように見えても、実際には人口減少への対応、防災力の強化といった高知市の考える主な課題とつながっています。だからこそ、１つ１つの課題を別々の課題と考えるのではなく、高知市の未来を支える共通の課題として、総合的に取り組んでいくことが重要でもあります。

本市は今、人口減少をはじめとする社会の変化の中にいます。1つの課題をとっても、その課題は複合的に他の課題と繋がっており、行政のみ、または1つの部署のみで解決することが困難な状況が多くなっています。この現実を見つめ、強みを最大限に生かしながら未来像の実現に向かって、分野を超えた視点で未来を切りひらきます。

# 第３章　未来像の実現に向けた施策の展開
## －６つの「しあわせの柱」と施策－

第３章では、未来像の実現に向けて取り組む施策を暮らしの場面ごとにお示しします。
市民の暮らしの課題は、行政の分野どおりに分かれてはいません。子育ての悩みは仕事や住まいの問題とつながり、災害への不安は地域コミュニティの問題とつながっています。
人口減少や南海トラフ地震への備えといった、社会の前提が変わる大きな変化に直面しており、課題の絡み合い方は以前よりも複雑になっています。
限られた資源の中で、期待する成果を上げるためには、これまで以上に、強く、意識的に分野の垣根を越えることが求められます。
本ビジョンでは、施策を進めるにあたり、すべての分野に共通する次の「４つの視点」を大切にします。

## 未来像の実現に向けたチャレンジ　分野を超えた4つの視点



### 視点１.垣根を越えて力を合わせること

複雑な課題に取り組むとき、大きな力となるのはつながりや協力です。
一つの分野の課題だと思われてきたものも、多くの分野の知恵を持ち寄れば、新しい解決策が見えてくるかもしれません。
これまで結び付くと思われていなかった分野同士の新しい組合せが、大きな突破口が開けることもあります。行政内の部署同士はもちろん、市民・地域・企業・大学など、多様な主体とも手を携えて進めていきます。



### 視点２.限られた資源を最も効果を生むところに使うこと

財源と人員には限りがあります。今あるものを漫然と維持するのではなく、最大の効果を生む事業に資源を賢く振り分け、持続可能な運営へ転換します。



### 視点３.聴くだけ、伝えるだけにしないこと

聴くだけ、伝えるだけの一方通行をやめ、市民の声に真摯に耳を傾け、また、行政側からも相手にわかりやすい言葉や方法で相手に「伝わる」ことを意識し、信頼と納得感が得られる市民サービスの提供を心がけていきます。



### 視点４.地域の支え合いを後押しすること

住民同士で互いに支え合えるコミュニティづくりを推進します。地域と行政がそれぞれの強みを生かしながら、地域を活性化し、まち全体の力を高めていきます。

高知市の未来像を実現するため、６つの「しあわせの柱」を軸に施策を進めていきます。

| ６つの「しあわせの柱」 | |
|---|---|
| 1 | 安心と快適が守る、しあわせな暮らし |
| 2 | まちの活気と共に、元気としあわせを育てる暮らし |
| 3 | 誰もが認め合い、自分らしいしあわせが見つかる暮らし |
| 4 | こども・若者が、しあわせな未来を描ける暮らし |
| 5 | つながりと愛着で心地よい、しあわせが寄り添う暮らし |
| 6 | しあわせな暮らしを支える行政 |

## しあわせの柱１　安心と快適が守る、しあわせな暮らし

| 施策No | 施策名 |
|---|---|
| 1-1 | 災害への強靭な備えで暮らしを守る |
| 1-2 | 命を守る救急や緊急対応を強化する |
| 1-3 | 地域での暮らしを守る医療、健康づくりを支える |
| 1-4 | 安心できる生活環境での暮らしを守る |
| 1-5 | 豊かな自然や大切な資源を未来へつなぐ |
| 1-6 | 暮らしに必要なインフラを維持する |

**しあわせの柱1に含まれる主な分野**

1-1　防災、減災、災害への対応、復旧・復興、住宅耐震化、災害医療、地籍調査
1-2　消防、救急、災害発生時の対応
1-3　地域医療、健康危機管理、健康づくり、国保運営
1-4　交通安全、消費者安全、生活衛生、動物愛護、斎場運営、墓地管理、住宅環境、
　　住宅セーフティーネット構築、空き家対策
1-5　環境保全、資源循環、脱炭素
1-6　都市形成、生活基盤、コンパクト・プラス・ネットワーク、地域公共交通

# しあわせの柱1　安心と快適が守る、しあわせな暮らし

## 未来の暮らしの姿

市民一人一人が、日々の暮らしのなかで安心を感じられるまちを目指します。南海トラフ地震などの「もしも」のときにも、地域と行政が支え合って落ち着いて行動でき、暮らしの再建まで見通せます。医療や消防・救急、道路や水道、住まいといった暮らしの基盤が守られ、資源が適切に循環し、清流や里山とともに健やかに暮らすことができます。安心感や快適さが日々の暮らしの中で感じられ、また、地域のつながりの中でも育まれます。そうした暮らしやつながりの土台を次の世代へと引き継いでいきます。

## 市のミッション

市民の生命と暮らしの土台を守ります。そのために、災害への備えを特別なものとせず、市民に身近な行政サービスの中にも防災の視点を取り入れるなど、毎日の暮らしの中に溶け込ませます。また、行政だけで抱え込まず、地域・市民・事業者・関係機関等と力を合わせ、限られた人や資源を必要なところへ割り当てながら、過度な負担を先送りせず、安心や快適の土台を次の世代へ確かに引き継ぎます。これらを通じて、「もしも」の時も「いつも」の暮らしも守り、誰もが安心して暮らし続けられるまちを実現します。

| | | |
|---|---|---|
| 施策1-1　災害への強靭な備えで暮らしを守る | 施策1-2　命を守る救急や緊急対応を強化する | 施策1-3　地域での暮らしを守る医療、健康づくりを支える |
| 施策1-4　安心できる生活環境での暮らしを守る | 施策1-5　豊かな自然や大切な資源を未来へつなぐ | 施策1-6　暮らしに必要なインフラを維持する |

## しあわせの柱１と「分野を超えた４つの視点」とのつながり

特に深いつながりがあるのは、「視点２.限られた資源を最も効果を生むところに使うこと」と「視点４.地域の支え合いを後押しすること」です。道路や水道等の都市基盤の整備・維持管理には膨大なコストがかかりますが、限られた資源を適正に配分しながら実施していく必要があります。また、南海トラフ地震への備えや地域医療、日々の防犯などは、行政の力だけで完結させることはできず、普段から顔の見える関係を築くことが、そのまま災害時の共助や、地域医療を支えることにもなります。「いつも」のつながりを「もしも」の強さに変えるため、全分野で地域・事業者とのネットワーク構築を最優先します。

現時点では仮の段階であり、今後の計画策定の過程で最終調整していきます。

## ショートストーリー（暮らしの場面と施策のつながり）

高知市で暮らす、高校生の私、さくら。私のなんてことない毎日の中には、たくさんの「安心」が隠れている。
朝、ごみを出す。ごみをきちんと分別することが私の習慣になり、鏡川や山々のきれいな自然を守ること、環境問題への関心も深まってきた。〔施策1-5〕
自転車で学校へ向かう通学路。道路がきちんと整えられ、見通しが良い。〔施策1-6〕
交差点で車が静かに止まる。私も周囲を確認しながら、スピードを出しすぎないよう気をつけて自転車を走らせる。交通ルールをきちんと守ることが、このまちの穏やかさを形づくっている。〔施策1-4〕
学校では、保健室の先生が「体は毎日の積み重ねだよ」と声をかけてくれた。そういえば、昨日、お父さんが、「今日も健診の結果を意識して一駅歩いたぞ」と言っていた。健診や体調の変化に気を配りながら、暮らしの中で健康を守ることが大事だと気付いた。医療や健康を支える仕組みは、目立たないけれど、暮らしの底で静かに人を支えている。〔施策1-3〕
放課後は、家から習い事のダンススクールへバスで通い、帰りはお母さんが車まで迎えに来てくれた。車、バス、電車、色々な乗りものが毎日の移動を支えてくれていて、暮らしの範囲を広げてくれている。〔施策1-6〕
ダンススクールの後は、すぐ近くに住むおばあちゃん家に行き、夕食を一緒に食べることに。それぞれの暮らし方に寄り添い、安らぐことができる住まいがあり、今日の出来事を語り合える場所がある。〔施策1-4〕
夕食の後、地域の防災訓練の話になった。もしものときにどう動くのか、家族や近所の人と確かめ合うと心細さがやわらぐ。備えとは、特別な日だけのものではなくて、日々の暮らしやつながりの中にあると思った。〔施策1-1〕
夜、遠くで消防車のサイレンが聞こえた。その音に、すぐに駆けつけてくれる人たちの姿を思う。何かあっても支えてくれる存在がいる。そのことが、このまちで暮らす人の心を、深く落ち着かせる。〔施策1-2〕
私の「普通の毎日」は見えないところで支えられている。 その静かな安心があるからこそ、私は明日も、いつもの朝へ向かって歩き出せる。

## 施策1-1　災害への強靭な備えで暮らしを守る

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

市民一人一人が災害情報に気を配り、防災についての知識を身につけられています。災害が起きても、自分や家族、近隣住民と支え合いながら、落ち着いて行動でき、その先の暮らしの再建まで見通すことができます。
また、平時と災害時の境界をなくし、日常に防災を溶け込ませる「フェーズフリー」の取組が、日常の安心感・地域への愛着・人とのつながりといった、暮らしの豊かさにまで波及します。

### 「今、向き合うべき現在地」

南海トラフ地震や近年増えている集中豪雨など、災害のリスクは年々大きくなっています。一方で、避難所の確保や医療機関等を含めた災害への備えには時間や費用を要することから十分な状況になく、また、地域のつながりも薄れてきている面もありますが、一方で、自主防災組織や関係機関のネットワークなどによる取組も進められています。誰もが安心して行動でき、その後の暮らしまで取り残されないために、地域と行政が力を合わせて備えを整えていく必要があります。

### 「未来を創るためのアクション」

防災を特別なものとせず、毎日の暮らしの中に溶け込ませます。挨拶や見守り、買い物の支え合いといった既存の地域活動に防災の要素を取り入れ、若い世代にはアウトドアやスマホツールなどを通じ、日常がそのまま備えとなるよう促します。また、福祉や保健、教育など身近な行政サービスにも防災の視点を組み込みます。
災害時に備え、日常生活で利用する橋梁の耐震化、公園の防災機能強化、道路ネットワークの耐震性の向上等に取り組みます。
避難所については、市内に加えて広域の避難先や在宅避難の選択肢を広げます。良好な避難生活や物資の確保に向けては、民間事業者や自主防災組織と連携します。また、災害時の医療提供に備え、医療機関との連携体制を整え、救護訓練やBCP整備や災害時に医療が提供できる体制の構築等、平時から準備を進めます。発災時の被害を最小限に抑えるため、住宅の耐震化や老朽化した空き家の除去、危険密集市街地の解消に向けた整備を強力に推進し、「倒れない、燃えない」災害に強い住環境づくりを地域と連携して進めます。あわせて、災害時でも機能が止まらない強靭な情報基盤を構築し、安心と便利が共存するサービスを追求します。
被災後は、わかりにくい支援制度を市民の目線で整理し、申請の壁で取り残される方がでないよう生活再建を支援するとともに、事前復興まちづくり計画の取組を推進することで早期復興を図り、人口流出を防ぎます。そして、大切なまちを残すため、単に元に戻すだけでなく、さらに暮らしやすいまちへとつなげる復興を進めます。災害ごみや災害用トイレへの備えについても、わかりやすい情報提供と、国・県・近隣自治体との連携による処理体制づくりを進めます。
集中豪雨への対策では、雨水施設の耐震化や老朽化対策に加え、公共下水道事業と河川事業が連携した浸水対策を進めます。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策1-2　命を守る救急や緊急対応を強化する

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

これからも、消防車や救急車がいつでも迅速、確実に駆け付けることで、安全・安心な暮らしが続きます。防災力の高まった住民同士の見守りや、行政の火災予防体制の充実により火災が減り、さらに、周りで急病人が出れば、その場に居合わせた人が積極的に応急手当を行います。
行政と市民がともにこうした取組を重ねることで、支え合う力が育まれ、火災や大規模災害といった「もしも」のときに誰もが命を守ることができます。

### 「今、向き合うべき現在地」

火災や救急、大規模災害にしっかり備えるためには、消防の施設や車両、人員を適切に維持していくことが大切です。一方で、財政状況の厳しさに加え、物価高騰の影響もあり、施設や車両の整備・維持管理に必要な予算の確保が課題となっています。
さらに、高齢化や人口減少が進む中で、消防団員の不足や自主防災組織の形骸化が進み、また、近年、地域で大きな災害を経験する機会が少ないことから、地域で支え合う力が弱まりつつある一因となっています。
救急の需要は今後も増えることが見込まれているため、確実な出動体制の確保はもちろんのこと、なくなることのない災害へ対応するための消防力を強化し、維持し続けることが求められています。

### 「未来を創るためのアクション」

将来の人口や財政の見通しを踏まえて優先順位を整理し、老朽化した庁舎の建替えや、適正な隊・資機材の再配置、車両の更新整備などを中長期的な視点で進め、これからも持続可能な出動体制を守っていきます。
災害対応能力の向上に向け、訓練の充実、関係機関との連携強化・迅速な情報共有を図るとともに、人材育成や予防啓発を推進し、消防力の強化・維持に資する体制を整え、安全・安心が追求されたまちの実現につなげます。
あわせて消防団への加入促進や自主防災組織への支援、地域防災訓練の充実を図り、地域と一緒に防災力を高め、いざというときに命を守れる体制づくりに取り組みます。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## 施策1-3　地域での暮らしを守る医療、健康づくりを支える

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

日々の暮らしの中で自然と健康が育まれ、体の変化に早く気づける機会が身近にあります。具合が悪くなれば身近な場所で診てもらえ、通院が難しくなっても、住み慣れた家で医療と介護の支えを受けて過ごせます。感染症の広がりや災害のときも、確かな情報と頼れる場所があります。こどもから高齢者まで、誰もが必要な医療を受けながら、地域で健やかに暮らし続けられます。

### 「今、向き合うべき現在地」

健康は暮らしの土台ですが、健康づくりに関しては、壮年期男性の死亡率が全国より高い値の年があり、がん検診の受診率が目標値に達していないなどの課題があります。年齢に関わらず、健康に関心が薄い人でも健康になれるように、健康に特化しない施策との連携も重要です。
医療の現場では、医療従事者の不足により体制の維持が難しく、在宅医療の担い手や医療と介護の連携も課題です。
国民健康保険などの運営では、医療費に関するデータ分析不足や、紙申請書中心の手続といった課題があります。また、医療保険制度が複雑で分かりにくく、所得に占める保険料が被用者保険と比べて高い水準であることから、より丁寧な対応が求められており、滞納の発生を最小限にしながら、高齢化による医療費の増加などにも対応できる、持続可能な運営が必要となっています。

### 「未来を創るためのアクション」

健康づくりでは、生涯を通じた健康づくりにつながる活動の支援を行います。多様なつながりのなかで健康づくりができるよう働きかけ、あらゆる生活の場が自然に健康につながる環境を整えるとともに、災害時を見据え、災害時に必要となる知識や行動に関する啓発を行います。
平常時の医療提供や感染症対策では、医療機関やその他の関係機関との連携を強め、医療現場に合わせた支援・調整を行うとともに、市民が利用できる制度についてわかりやすくお伝えします。
保険運営では、データ基盤を整えて手続の電子化・自動化を進めること、滞納には早期に介入すること、市民にわかりやすく説明することを目指します。
また、県内における事務の統一や広域化を行い、県や後期高齢者医療広域連合との連携や国への働きかけを進めます。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策1-4　安心できる生活環境での暮らしを守る

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

食の安全や衛生的な生活環境が保たれ、日々の暮らしの中で安心を感じられます。また、社会情勢の変化により高まる多様な居住ニーズに対し、市営住宅や民間賃貸住宅等を活用して住まいを確保でき、安心して暮らすことができます。さらに、交通や消費生活など身近な場面での不安やトラブルに対して、必要な情報が得られ、相談することができます。人と動物が共に健やかに暮らせる地域づくりも進むことで、生活環境への信頼と満足感が高まります。

### 「今、向き合うべき現在地」

市民の暮らしを支える生活環境は多岐にわたりますが、高齢化や人口減少の進行により、必要とされる支援やサービスの内容は変化しています。食の安全や衛生的な生活環境の確保に加え、消費生活に関する不安やトラブルへの対応や、適正計量による取引の安定など、日常生活に身近な安心を支える取組が求められています。
住環境の分野では、単身世帯の増加や持ち家率の低下により高齢者や低額所得者などの住まいの確保に配慮が必要な市民への支援が求められる一方、市営住宅では老朽化が進行し、ニーズとのミスマッチも生じています。民間賃貸住宅等の活用を広げるには、地域全体で安心して住まいを確保し、暮らし続けられる体制づくりが必要です。また、空き家が増加しており、適切な管理が行われず放置されると、防災、衛生、景観等地域住民の生活環境に影響を及ぼします。また、斎場の稼働状況も高く、設備の維持は課題となっています。
さらに、動物愛護などの相談・共生の分野では、人と動物が共に健やかに暮らせる環境づくりが重要となっています。
こうした課題に対し、限られた財源の中で優先度を見極め、実効性のある取組を着実に進めていくことが必要です。

### 「未来を創るためのアクション」

関係機関や地域と連携し、食の安全や生活衛生の確保、消費生活に関する相談・啓発、身近な安全に関する意識の向上など、市民の暮らしを支える取組を着実に進めます。
住環境については、市営住宅の再編等を進めるとともに、民間賃貸住宅等の活用を進めます。住まいと福祉の連携を強め、居住の確保と安定を図り、多様な暮らしに応じた安心できる住環境を整えます。あわせて、空き家の適切な管理・利活用の促進や空き家を未然に防ぐ取組も進めます。また、斎場の安定した運営を行います。
さらに、デジタルの活用により監視・確認体制の効率化を進めるとともに、消費者被害の防止啓発や人と動物の共生に向けた地域づくりを推進し、安心できる生活環境を支えていきます。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## 施策1-5　豊かな自然や大切な資源を未来へつなぐ

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

ごみの適切な分別や排出が行われ、高齢などでごみ出しに困っている方も安心して暮らせます。再生可能エネルギーやリサイクルが特別なことではなく暮らしの一部となり、環境への配慮がごく自然にできるようになります。清らかな鏡川や豊かな里山が守られ、こどもたちが自然とふれあいながら学べます。限られた資源を大切に循環させ、きれいな環境を次の世代へと引き継いでいきます。

### 「今、向き合うべき現在地」

これまで、市民・事業者・行政の協働による分別収集をはじめ、ごみの適正処理や自然環境の保全に取り組んできましたが、今、その土台が大きく揺らいでいます。
ごみの分別では、排出ルールを知らない、分かりにくいと感じている方もいるほか、ごみステーションを管理する担い手が高齢化や人口減少で不足しています。
清流・鏡川を育む森林や里山は管理が行き届かなくなり、川への関心の低下も見られます。脱炭素の取組も、誰もが必要性は感じているものの、効果が見えにくく、まだまだ十分とは言えません。このように、担い手・市民の関心という、大きな要素が同時に減少しつつあります。
さらに、焼却施設やし尿処理施設は老朽化が進み、更新には大きな財政負担を伴います。

### 「未来を創るためのアクション」

市民・事業者と協働し、ごみの減量と資源循環、自然との共生、脱炭素、それぞれの取組を進めます。
身近なごみの分野では、一人一人が日常生活の中で3Rを意識し、実践が根づくよう促します。また、ごみの分別や排出が負担になりすぎない仕組みを工夫します。あわせて、ごみ出しが難しい方への「ふれあい収集」の充実など、必要とされる支援を進めていきます。
施設面では、計画的な長寿命化整備及び適切な維持管理により、焼却施設やし尿処理施設のライフサイクルコストを抑えつつ災害時にも機能する体制を整え、技術を確実に継承します。さらに、適正処理を行うとともに、その処理過程で発生する熱エネルギーや焼却灰などを資源として有効活用し、引き続き資源循環に取り組んでいきます。
鏡川流域や里山の保全では、関係機関と連携し、環境教育や自然体験の機会を広げるほか、鏡川流域での自然と人をつなぐ担い手づくりとして、関係人口の拡大を目指し、自然への関心を育てます。
脱炭素では、市民・事業者の地球温暖化対策への理解をさらに深め、行動変容を促すための啓発を行うとともに、脱炭素につながるさまざまな取組への支援を行います。
あわせて、工場の排水・排煙の監視や生活排水・不法投棄対策を続け、安心して暮らせる生活環境を守ります。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策1-6　暮らしに必要なインフラを維持する

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

毎日使う道路や橋、蛇口をひねれば出てくる水、使った水を適切に処理して自然に返す下水道、そして安心して過ごせる公園や公共施設といった暮らしを支える基盤が、これからも変わらず安全に使い続けられます。また、移動に困る人が減り、災害のときにもインフラが機能して、早く日常を取り戻せます。これらの基盤が、限られた財源のなかでも計画的に守られ、過度な負担を次の世代に先送りすることなく、安心して暮らせるまちが受け継がれていきます。

### 「今、向き合うべき現在地」

道路や橋、上下水道、公園、公共施設など、暮らしを支える基盤は、その多くが高度経済成長期に一斉に整備されたため、更新の時期が今まさに集中し、老朽化への対応が急務となっています。道路や橋梁では未整備区間や危険箇所、老朽化した橋梁への不安が残り、上下水道では老朽化が進行すると、事故や漏水、道路陥没などの発生リスクが高まることから、維持管理を適切に行うことが重要となってきます。また、南海トラフ地震対策についても、なお推進の途上です。公園や公共施設も、老朽化と維持管理コストの増加に直面しています。また、地域交通では運転手不足や利用者減少でバス路線の廃止・減便が続き、移動に支障が生じています。
これらに共通するのは、施設の老朽化に加え、人口減少による収益・需要の減少、物価高騰、関係機関との合意形成の難しさといった構造的な課題です。さらに、当たり前に存在すると感じられる基盤ほど、将来のリスクや負担の意義が市民に伝わりにくいという難しさも抱えています。

### 「未来を創るためのアクション」

人口減少が進む中でも市民の暮らしと移動を支えるため、都市の機能を集約し、それらを公共交通で結ぶまちづくりを軸に、都市基盤の整備と維持を一体的に進めます。骨格となる交通ネットワークについては、運転手不足の中でも将来に渡り維持していけるよう、多様な交通モードを検討し、市民の暮らしに沿った快適な移動手段を確保します。道路は役割に応じて優先順位を整理しながら計画的に整備します。
また、災害時に備え、日常生活で利用する橋梁の耐震化、公園の防災機能強化、道路ネットワークの耐震性の向上などにも取り組みます。
これらの基盤を将来にわたり維持するため、データに基づく予防保全型の維持管理を行います。上下水道では、日々の点検・調査を適切に実施し、施設の長寿命化や計画的な更新を進めます。また、維持管理にあたっては、DXや新技術を活用して効率性を高めます。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## しあわせの柱２　まちの活気と共に、元気としあわせを育てる暮らし

| 施策No | 施策名 |
|---|---|
| 2-1 | 豊かな自然を生かした農林水産業を支える |
| 2-2 | 地域を支える産業の活力を育てる |
| 2-3 | まちのにぎわいや交流を生み出す商業を活性化する |
| 2-4 | 高知の魅力を磨き発信し、観光価値を高める |

**しあわせの柱2に含まれる主な分野**

2-1　農業・林業・漁業振興、鳥獣対策、市場運営、食品流通
2-2　産業政策、企業、誘致、雇用
2-3　中心市街地・商店街・街路市の発展
2-4　観光振興、観光の魅力創出

# しあわせの柱2　まちの活気と共に、元気としあわせを育てる暮らし

## 未来の暮らしの姿

豊かな地域資源や最新技術を味方に、市民一人一人が誇りを持って働くことで、充実した日々を送ることができます。挑戦する人が輝く産業の熱量は、魅力あふれるまちの活気となり、ここで暮らす人々に日々の元気と新しい刺激を与えてくれます。多様な交流とにぎわいに包まれ、このまちの魅力を再発見しながら、住む喜びを実感し、誰もが明日への活力を得られる豊かな日常を次世代へとつないでいくことができます。

## 市のミッション

地域産業の変革を後押し、持続可能な成長産業へと進化させることで、地域の稼ぐ力を最大化します。各分野の特性を生かしながら、デジタル化やスマート技術の導入を支援するとともに、官民一体となって地域の魅力を戦略的に発信し、本市を訪れる人がその魅力に触れ、満足度の高い滞在を楽しめる環境を整えることで、その効果を地域経済の循環につなげます。また、地域に根付き、暮らしを支える商いと交流の場を、誰もが安心して集えるにぎわいの拠点として磨き、次世代に継承される都市の魅力を高めます。現場の声を起点とした伴走型支援と関係機関との緊密な連携により、多様な人材や事業者が挑戦し続けられる環境を整え、経済の活性化と市民の豊かな暮らしが共鳴する持続可能な社会を共に築きます。

| | | |
|---|---|---|
| 施策2-1　豊かな自然を生かした農林水産業を支える | 施策2-2 地域を支える産業の活力を育てる | 施策2-3　まちのにぎわいや交流を生み出す商業を活性化する |
| 施策2-4　高知の魅力を磨き発信し、観光価値を高める | | |

**しあわせの柱２と「分野を超えた４つの視点」とのつながり**

特に深いつながりがあるのは、「視点１.垣根を越えて力を合わせること」と「視点３.聴くだけ、伝えるだけにしないこと」です。
民間企業や関係機関との官民一体となった協力関係・連携が非常に重要であり、さらに、現場の声を起点とした支援を徹底することが、「稼ぐ力」を高めることにつながります。

ショートストーリー

今後の計画策定の過程で、ショートストーリーを作成していきます。
（しあわせの柱１のみサンプルを作成済）

## 施策2-1　豊かな自然を生かした農林水産業を支える

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

農業・漁業・林業が「稼げる産業」へと変わることで、若い世代や新たな担い手が地域に入り、卸売市場等をはじめとする流通の現場を通じて、私たちの食卓に新鮮な農産物や魚が安定して届き続けます。手入れの行き届いた森林は、水を蓄え、災害から私たちを守り、豊かな自然を次の世代へ受け継ぎます。耕作放棄地や放置された森林が減り、農村や中山間地域の景観と暮らしが守られます。一次産業が元気を取り戻すことで、地域全体に活力と安心が広がっていきます。

**「今、向き合うべき現在地」**

私たちの暮らしを支える一次産業は、今、共通の深刻な課題に直面しています。まず、担い手の不足と高齢化が深刻で、耕作放棄地の拡大や森林管理の遅れを招いており、防災や環境保全といった多面的な機能が失われつつあります。経営面では、資材や燃油の高騰分を価格に転嫁しにくい構造に加え、気候変動による収穫の不安定化が追い打ちをかけており、スマート技術の導入も一部に留まっています。さらに、老朽化した農業施設等の更新負担や、中山間地域の厳しい生産条件、現場のニーズと支援制度の隔たりといった壁も立ちはだかっています。これらの複雑な課題を解決するには関係者間の調整が不可欠ですが、その役割を担う専門知識を持つ人材や職員が不足していることも障壁となっています。

**「未来を創るためのアクション」**

一次産業を「稼げる産業」へと転換し、担い手の育成と確保を通じて農・漁・林業と地域社会を未来へつないでいきます。まず、生産から消費までを一体的に捉え、流通のパートナーである卸売市場や関係機関が現場の声に寄り添い連携する支援体制を充実させます。農業においては、スマート農業やIoP技術の導入による高収益化を進めるとともに、農地の集約や基盤整備、老朽化した農業施設の計画的な更新またはそれに対する支援を行い、生産性を向上させます。また、環境に配慮した農法への支援や新規就農者への伴走支援、中山間地域の多面的機能発揮につながる農業生産活動の推進を図ります。漁業では、データに基づいた効率的な操業への転換を支援し、漁港などの施設管理と流通体制を維持します。森林・林業については、再造林や木材循環の仕組みづくりを支援するほか、既に進めている森林の集約化や公有林化も視野に入れ、多面的な機能を持つ森林資源を適切に守り育てていきます。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策2-2　地域を支える産業の活力を育てる

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

市内の多様な事業者が、それぞれの強みを生かして新たな価値を生み出し、地域の商品やサービスが市内外で選ばれることで、事業者の経営が安定し、働く人の所得や雇用環境が向上しています。若者にはデジタル技術を活かした最先端の仕事や地元の伝統を継承する仕事など、多様で魅力的な選択肢が開かれており、奨学金の返還支援などを受けながら安心して将来を描くことができています。また、働く意欲のある人が、それぞれの経験を活かして自分らしく活躍できる場が街中に溢れています。地域の外とのつながりも増え、新たな人や交流がまちを元気にします。

**「今、向き合うべき現在地」**

地域の活力を維持するためには「稼ぐ力」が不可欠ですが、現在、地元の経済は大きな困難に直面しています。市内企業は、人手不足や物価高騰、脱炭素化といった急激な環境変化への対応を迫られていますが、デジタル化や事業継続への備えには業種・規模間で格差があり、具体的な着手方法に苦慮しています。また、優れた地元産品を雇用や収入に繋げる販路開拓も十分ではなく、担い手不足が新たな活力を阻んでいます。
働く側においても、現役世代のみならず、高齢者、そしてこれから社会に出る若者が、それぞれの希望や生活環境に合った仕事を見つけるためのマッチングや、安心して働き続けるための福利厚生の充実など、解決すべき課題が依然として残されています。

**「未来を創るためのアクション」**

市内事業者の挑戦を後押しし、地域産業が生み出す商品やサービス等の魅力や価値を発信するとともに、地域経済の活性化を図ります。
まず、企業の課題に応じたデジタル化や省力化、設備投資、事業継続への備えを県や国、専門機関と連携して段階的に支援し、時代の変化に負けない強い産業基盤を共に築きます。
販路拡大においては、ふるさと納税などを活用して地元産品のファンを増やし、継続的な取引や新商品の開発を支えるとともに、地域外の多様な人材を呼び込み、生業と交流が生まれるまちづくりを進めます。
また、あらゆる世代の求職者一人一人に寄り添った就労支援や、市内企業での人材定着を支援する施策を重層的に展開します。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## 施策2-3　まちのにぎわいや交流を生み出す商業を活性化する

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

中心市街地や商店街、街路市が今よりもっと賑わい、新たな世代の出店者やお店が加わることで、身近な場所で買い物や交流を楽しめるようになります。空いていた店舗に新しいお店が入り、安全で快適な街並みが守られることで、まちなかでの日常がもっと楽しく、安心できるものになります。人々が行き交う商店街の賑わいと、受け継がれてきた街路市の文化が、これからの世代へと確かに引き継がれていきます。

**「今、向き合うべき現在地」**

ライフスタイルの変化により、商店街などの商業地を取り巻く環境も変わってきています。ネット通販などの台頭により市民の消費行動が多様化する中、市の中心部の居住者が増えている一方で、商店街では、空き店舗の活用が進まないケースも目立ちます。さらに、街中に宿泊施設の整備が進み、インバウンド等の国内外からの観光客が多く訪れることにより、商店街や街路市に求められるニーズや価値観が変容していくことに、的確に対応していく必要があります。また、街路市においては、高知市における観光名所である一方で、地元利用者の減少が進むとともに、街路市出店者の高齢化と後継者不足による減少傾向にあります。

**「未来を創るためのアクション」**

商店街と街路市を単なる商業施設ではなく、暮らしを支える「交流と安心の拠点」として再定義し、その賑わいを次世代へつなぎます。
商店街においては、人流データ等の活用により客観的な現状把握を行い、エリアごとの特性を踏まえた合意形成を促進します。空き店舗については、様々なアプローチにより活用を促し、地域の資産としての再生を図ります。
街路市では、キャッシュレス化や多言語発信による利便性向上に加え、新規出店者の確保に向けた取組を進め、丁寧な対話を通じて裾野を広げます。
これらの取組により、持続可能なまちづくり、歴史ある街路市のさらなる活性化を推進します。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策2-4　高知の魅力を磨き発信し、観光価値を高める

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

磨かれた観光の魅力に引かれて多くの人がまちを訪れ、消費額が増えることで地域の事業者の収入や雇用の質が向上し、新たな仕事や活気を生み出します。観光が採算性の優れた産業として根づくことで、観光のにぎわいが暮らしの豊かさへとつながり、訪れる人だけでなく、ここに住む私たち自身も改めてまちの魅力に気づき、まちに誇りを感じられるようになります。

**「今、向き合うべき現在地」**

豊かな歴史や食、自然に恵まれた本市にとって、観光は地域活性化の鍵となる産業であり、魅力の認知はされているもの、市民の豊かさに直結していないという課題があります。背景には、物価高騰によるコスト増や人口減少、高齢化による深刻な人手不足が取組に影響を及ぼしています。また、価値観の多様化によるニーズが変化するなかで、滞在満足度を高める高付加価値な体験プログラムの提供も不足しています。さらに、観光ビジネスの採算性や財政基盤が弱く、持続的な施策を推進するうえでの大きな障壁となっています。

**「未来を創るためのアクション」**

既存の観光資源の魅力を高めるとともに新たな魅力を創出し、戦略的な施策を展開していくことで観光消費額の拡大を目指します。施策を展開していくうえでは官民一体となった取組を重視し、行政と民間事業者が足並みを揃え、限られた予算を最大限に活かす施策を共に検討・展開していきます。また、効果的な取組を継続して実施するための安定した財源確保にも取り組みます。既存の観光資源の魅力向上に向けて、歴史・食・自然などの既存の観光資源を最大限活かすことに加え、図書館やプラネタリウム、体験型展示など、天候に左右されず楽しめる屋内施設も本市の観光資源として捉え、選択肢の拡充と魅力の向上につなげます。観光入込客数だけでなく、満足度を高めることで、観光のにぎわいが市民一人一人の豊かさを育み、高知市全体が活気に満ち溢れているような環境を築いていきます。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## しあわせの柱３　誰もが認め合い、自分らしいしあわせが見つかる暮らし

| 施策No | 施策名 |
|---|---|
| 3-1 | 高齢者が安心していきいきと暮らし続けられる支援体制を整える |
| 3-2 | 障がいの有無にかかわらず、互いに支え合うインクルーシブな地域を育む |
| 3-3 | 生活の困難を抱えた人に寄り添い、自立の土台をともに築く |
| 3-4 | 生涯にわたる学びの機会を整える |
| 3-5 | 平和を礎に、人権、多様性、ジェンダー平等を尊重しあう地域社会を実現する |

**しあわせの柱3に含まれる主な分野**

3-1　地域包括ケアシステムの推進、高齢者のいきがい・健康づくり、
　　介護サービスの確保・整備
3-2　障がい者支援、点字図書館運営
3-3　生活困窮者自立支援、公的扶助、犯罪被害者等支援
3-4　生涯学習の機会提供
3-5　平和の継承、人権尊重、ジェンダー平等、多様性、国際交流、多文化共生

## しあわせの柱3　誰もが認め合い、自分らしいしあわせが見つかる暮らし

### 未来の暮らしの姿

人権と平和を尊ぶ心を次世代へつなぎ、年齢や性別、国籍、生まれた場所や社会的な立場、障がいの有無などに関わらず、互いの尊厳を認め合いながら共に生きています。生涯を通じて学び、その経験を自分のために、また誰かのために活かして活躍する人の姿は、地域に活気を与え、そこに集う人々に明日への元気をもたらします。住み慣れた地域で健やかに自分らしく暮らし続け、困難なときには温かな支え合いと確かな仕組みに守られます。多様な個性が重なり合うこのまちで、誰もが主役としていきいきと輝き、心豊かな人生を送ることができます。

### 市のミッション

年齢や性別、国籍、生まれた場所や社会的な立場、障がいの有無といった違いを超え、誰もが尊重され、一人一人が自分らしく力を発揮できる社会を築きます。生涯を通じて学びの機会が得られることにより、学びの成果が他者に認められ、自信と誇りにつながるとともに、世代を超えた交流と地域の絆を深め、その関わりからまた新たな学びが育まれる循環を生み出します。
また、複雑化する暮らしの課題に対応するため、専門的な支援を続けながら、これまでの縦割り制度や「支える側・支えられる側」という固定的な枠組みを超えて支え合う地域共生社会の基盤をつくり、強固なセーフティーネットを確立します。

| | | |
|---|---|---|
| 施策3-1　高齢者が安心していきいきと暮らし続けられる支援体制を整える | 施策3-2　障がいの有無にかかわらず、互いに支え合うインクルーシブな地域を育む | 施策3-3　生活の困難を抱えた人に寄り添い、自立の土台をともに築く |
| 施策3-4　生涯にわたる学びの機会を整える | 施策3-5　平和を礎に、人権、多様性、ジェンダー平等を尊重しあう地域社会を実現する | |

### しあわせの柱３と「分野を超えた４つの視点」とのつながり

特に深いつながりがあるのは、「視点４.地域の支え合いを後押しすること」です。
しあわせの柱３が描く姿そのものが、視点４の目指す姿と合致しています。年齢や性別、国籍、生まれた場所や社会的な立場、障がいの有無などに関わらず、互いの尊厳を認め合う土壌こそがしあわせの柱３の出発点です。住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けるためには、制度としての福祉だけでなく、地域の中での住民同士の支え合いが自分らしい暮らしを支えています。

ショートストーリー

今後の計画策定の過程で、ショートストーリーを作成していきます。
（しあわせの柱１のみサンプルを作成済）

## 施策3-1　高齢者が安心していきいきと暮らし続けられる支援体制を整える

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

元気なうちから自分の健康や暮らしに向き合い、住み慣れた地域で自分らしく年を重ねています。体操や趣味の集まり、支え合いの活動―それぞれの得意なことを活かして地域で役割を持ち、いきいきと活躍しています。認知症になっても、介護が必要になっても、本人の意思が尊重され、尊厳を保ち、希望をもって過ごせます。医療や介護、地域の人たちの気づきや支え合いが結びつくことで、いつまでも安心して暮らすことができます。

### 「今、向き合うべき現在地」

本市の高齢化は全国に先行して進み、要介護認定者や認知症の高齢者も今後増える見込みです。また、一人暮らしの高齢者や老老介護の世帯も増えています。今後も加速する人口減少と高齢化に伴い、福祉・医療等の給付費が増大し続けるとともに、福祉・介護を支える専門人材が不足する事態も避けられません。
また、従来の高齢者支援は介護サービス中心になることが多く、フレイル状態となっても再び元気になれるということを高齢者自身が知らないことや、諦めている現状があります。加えて、地域とのつながりの希薄化により、地域での支え合いが十分に機能しづらくなっています。
介護サービスのみに頼らない、地域全体で支え合う基盤の再構築が急務となっています。

### 「未来を創るためのアクション」

一人一人が元気なうちから取り組むセルフマネジメントを後押しするとともに、介護予防や社会参加を積極的に推進します。フレイル状態からの回復に高齢者自らが前向きに取り組めるよう啓発、支援します。
認知症については、早期に相談できる体制を整えるとともに、認知症に対する社会の理解を深めることで、地域ぐるみで見守り、支える輪づくりを進めます。
介護の必要な状態になっても、要介護認定の効率化により、必要なサービスを速やかに利用できる体制を整えます。
施設や住宅については、身寄りのない高齢者でも安心して利用や入居ができるよう、受け入れ体制の構築を検討します。
今後も必要な支援を届けながら、誰もが地域で役割を持ちながら生き生きと活躍できる環境を整えることで、住み慣れた地域で安心して暮らせる「地域包括ケアシステム」をさらに深化させていきます。

### 「関連する他の「視点」の施策」

施策
施策

## 施策3-2　障がいの有無にかかわらず、互いに支え合うインクルーシブな地域を育む

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

障がいや疾病の有無にかかわらず、お互いの個性を尊重し合い、支え合って暮らしています。障がいのある人は、自分の生活や活動を自分で選び、決めることができます。子どもから大人になるまで、切れ目のない支援を身近な場所で受けられ、住まいや働く場、学びや余暇の選択肢があります。一人一人が自分の力を発揮し、地域で役割を持ちながら、夢や希望に向かっていきいきと輝いて暮らすことができます。

### 「今、向き合うべき現在地」

相談窓口や制度が分野ごとに分かれているため、本人や家族が必要な支援にたどり着きにくい状況があります。特に、学校から就労へ、そして地域での暮らしへと移る節目で支援が途切れやすく、生活や孤立への不安が生じています。医療的ケアが必要な方や重度の障がいのある方を受け入れられる事業所は依然として少なく、重度化・高齢化に伴う「親亡き後」への備えも十分とはいえません。支援を担う地域団体や事業者の人材・運営基盤は安定しているとは言い難く、連携を続けていくことにも課題があります。また、障がいや疾病、多様な特性に対する社会の理解も十分ではありません。

### 「未来を創るためのアクション」

進学や就職といった生活の節目で支援が途切れないよう、関係機関が情報を必要な方に届け、支援する伴走体制をつくります。
関係機関同士のスムーズな情報共有や、地域ごとに学校・医療・職場・住まいの連携について定期的に協議できる仕組みを検討します。加えて、サービスや支援内容に関する、利用者本人や家族の意思決定に対して支援を充実させます。
また、社会参加や雇用を促進させるため、当事者同士による支え合い「ピア支援」や、企業の受け入れの広がりを後押ししていきます。
今後も、障がいや疾病への正しい理解を深める学びの機会の充実や権利を守る取組なども進め、住民同士の支え合いの文化を育てます。

### 「関連する他の「視点」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## 施策3-3　生活の困難を抱えた人に寄り添い、自立の土台をともに築く

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

予期せぬ犯罪に巻き込まれたり、経済的に困難な状況に直面するなど、生活の中で困難を抱えることがあっても、誰もがためらわず相談でき、自分に最適な支援にたどり着くことができます。制度の狭間で取り残されることなく、一人一人に寄り添う支援と強固なサポート体制によって、誰もが「困ったときには必ず支えてもらえる」という安心を抱いて暮らすことができます。

**「今、向き合うべき現在地」**

生活保護制度への誤解や抵抗感から、支援が必要な方に手が届いていない現状があります。制度自体が複雑で難解なこともあり、支援を拒む方や制度の狭間で孤立する方も少なくありません。就労支援においても、多様化する働き方の中で、本人の意欲を引き出し、個々の能力を的確に把握することが難しくなっています。さらに、増大する多様なニーズに対し、制度間の連携や行政の業務負担が増大しており、きめ細かな対応を維持する体制の整備が求められています。
また、犯罪に巻き込まれた被害者やその家族は、加害者による直接的な権利侵害だけでなく、収入途絶、裁判等での精神的・時間的負担、うわさや中傷によるプライバシーの侵害等といった二次的な被害など、様々な困難に直面する場合があり、経済的なサポートや心身のケアが求められています。

**「未来を創るためのアクション」**

支援を必要とする方を確実につなぎ、一人一人の自立を後押しするとともに、それを支える体制を強化します。関係機関との緊密な連携により、制度を敬遠しがちな方や情報が届いていない方へも丁寧にアプローチし、生活保護に限らず活用できる多様な支援を提案します。自立支援においては、就労支援員とケースワーカーが協力して個々の課題と能力を見極め、状況に応じたきめ細かなサポートで就労を後押しします。
また、犯罪被害に遭われた方については、平穏な生活を取り戻すまでの間、必要な支援をスムーズに受けられるよう、関係機関と連携を取りながら、総合的な支援を行います。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策3-4　生涯にわたる学びの機会を整える

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

年齢を問わず誰もが学びを楽しみ、地域の中で生き生きとつながりを持って暮らしています。公民館や図書館などの身近な施設は、多様な活動や交流が生まれる温かな拠りどころとなり、そこでふれあう人々や出会う本が思いがけない学びへの扉を開いてくれます。そして、得られた知識や技術を地域に還元しながら、自己実現を叶えることができます。
学びを通じ、世代を超えた様々な人や地域との交流・絆が深まるとともに、それらの関わりからもさらなる学びを得、育まれていきます。

**「今、向き合うべき現在地」**

ライフスタイルの多様化や少子高齢化により、地域コミュニティのつながりの希薄化が進んでいます。地域の学びや生涯学習を支えてきた公民館等においては、施設の老朽化が進行し、耐震化や機能の見直しが急務となっています。利用者の固定化や高齢化が進み、現役世代や子育て世帯にとっては気軽に立ち寄れる場所として十分に機能しておらず、人口減少がその傾向に拍車をかけています。また、限られた資源のなかで多様なニーズに応えることが難しくなっており、市民の「学びたい」「活動したい」という意欲に応えるための人材発掘や、広域的な学習機会の場の提供についても、時代に合わせた更なる充実が求められています。

**「未来を創るためのアクション」**

学びと交流の輪を広げるために、市民の主体的な活動を支える基盤づくりを進めます。
まず、公民館等のこれまでの学習活動の機能を大切な土台としながら、機能や利用方法等、時代に即したあり方の検討を進めます。誰もが気軽に立ち寄れる開かれた空間として開放するとともに、図書館などの他の施設とのつながりを強化することで、子育て世帯や学生といった多様な利用者層のニーズや市民の新たなスキルを呼び込む「学びと交流の場所」へと進化させ、地域に根ざした生涯学習とコミュニティ活動をバックアップします。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## 施策3-5　平和を礎に、人権、多様性、ジェンダー平等を尊重しあう地域社会を実現する

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

誤解や偏見による差別を受けることなく、また、性別や年齢、国籍、障がいの有無などにとらわれず、誰もが自分の意思で人生を選び、力を発揮できます。「こうあるべき」という枠に固定されることなく、家庭や職場、学校、地域のあらゆる場で、一人一人が声を届けられます。多様な文化的背景を持つ人が隣人として暮らし、言葉の壁があっても必要な情報や支援が届きます。一人の命と尊厳を大切にする心は、一人一人を大切にする行動と平和を願う思いを育て、次の世代へ受け継がれていきます。

### 「今、向き合うべき現在地」

人権尊重や平和の理念は一定の理解を得てきましたが、日々の暮らしに根づかせ、次の世代へつなぐことに課題があります。
「女性だから」「高齢だから」といった固定化した見方が、無意識のうちに人の役割や可能性を狭めています。部落差別や、誤解・偏見による差別も根強く残っています。また、外国人住民は増えていますが、言葉の壁により情報が届きにくい状況があるほか、異なる文化に対する理解不足も生じています。
個々の違いを認め、多様な人々が共に生きる社会をつくるためには、さらなる啓発や支援が求められます。
また、戦争を体験した世代が少なくなり、戦争の記憶を次世代へどう手渡すかも課題となっています。

### 「未来を創るためのアクション」

一人一人が尊重され、誰もが自分らしく力を発揮できる社会を市民と共に築きます。
男女共同参画では、ジェンダー平等の意識を広め、組織横断的な対応によって性別を問わず活躍できる取組を推進します。
多文化共生においては、国際交流員による多言語支援や異文化理解を深める活動を通じ、外国人住民も安心して暮らせる環境を整えます。
平和の継承については、記念事業をはじめ、様々な機会を通じた啓発を行い、戦争の記憶を次世代へ語り継ぎます。
全ての分野で、人権尊重の主役が市民一人一人であることを伝え、対象者に応じた工夫ある広報や教育を展開することで、関心の薄い層にも届く効果的な啓発を続けていきます。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。

## しあわせの柱４　こども・若者が、しあわせな未来を描ける暮らし

| 施策No | 施策名 |
|---|---|
| 4-1 | 子育て家庭に寄り添い、こどもの健やかな育ちを支える |
| 4-2 | 未来をひらく力を育む学校教育を実践する |
| 4-3 | こども・若者の権利が守られ、安心できる居場所を創る |
| 4-4 | 自分らしい未来をデザインするための教育・啓発を展開する |
| 4-5 | こども・若者の声を尊重し、活躍できる地域社会を創る |

### しあわせの柱4に含まれる主な分野

4-1　子育て家庭への支援、保育、困難家庭への支援、母子保健
4-2　学校教育、学びの多様化学校、学習支援
4-3　青少年の健全育成、こども・若者の居場所づくり
4-4　キャリア教育、健康教育（プレコンセプションケア、ライフコースアプローチ等）
4-5　こども・若者の権利保護、こどもまんなか社会

# しあわせの柱4　こども・若者が、しあわせな未来を描ける暮らし

### 未来の暮らしの姿

こども・若者が、守られるだけの存在ではなく、自分の意見を伝え社会づくりに参加できる存在となり、学校や地域の中で自分の考えを話すことや、他の人と協力する経験により、社会を生きる力を獲得しています。さらに、学び方や生き方の選択肢がたくさんあり、学校で学ぶだけでなく、地域活動やオンライン学習、様々な体験を通して、自分の興味や個性を伸ばすことができます。失敗してもやり直せる社会の中で、安心して挑戦できます。

### 市のミッション

こども・若者一人一人が安心して育ち、自分らしく学び、挑戦し、未来に希望を持てるまちをつくります。
家庭環境や経済状況に関わらず、意欲的に学び、挑戦できる環境や、必要な支援を受けられる体制を整えます。また、学校・家庭・地域・行政が連携し、こども・若者が学校以外で安心して過ごせる居場所や、多様な学び・体験の機会、こどもの活躍の場を充実させます。さらに、失敗してもやり直せる仕組みや、進路・就労・自立を切れ目なく支える支援を進め、こども・若者の今を大切にしながら、将来のしあわせをともに育みます。

| | | |
|---|---|---|
| 施策4-1　子育て家庭に寄り添い、こどもの健やかな育ちを支える | 施策4-2　未来をひらく力を育む学校教育を実践する | 施策4-3　こども・若者の権利が守られ、安心できる居場所を創る |
| 施策4-4　自分らしい未来をデザインするための教育・啓発を展開する | 施策4-5　こども・若者の声を尊重し、活躍できる地域社会を創る | |

### しあわせの柱４と「分野を超えた４つの視点」とのつながり

特に深いつながりがあるのは、「視点１.垣根を越えて力を合わせること」と「視点３.聴くだけ、伝えるだけにしないこと」です。
社会でこどもや若者が主役になるためには、一人の市民として尊重し、その声を聴くことが大前提です。また、こどもの成長は、学び、進路、就労と、ライフステージごとに関わる分野が移り変わります。誕生前から社会へ羽ばたくまで、切れ目ないサポートには組織の壁を越えた密接な連携が必須であり、保育所や学校、地域団体、その他様々な主体が一つのチームとして成長を支えるネットワークを構築することが重要です。

ショートストーリー

今後の計画策定の過程で、ショートストーリーを作成していきます。
（しあわせの柱１のみサンプルを作成済）

## 施策4-1　子育て家庭に寄り添い、こどもの健やかな育ちを支える

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

すべての乳幼児が、すこやかな育ちの基礎となる愛着をしっかりと育み、豊かな遊びと体験の機会を十分に得られています。学齢期以降のこどもたちは、この確かな基礎のうえで、自発的な発見や探索を重ねながら、安心して遊び、体験し、学ぶことができます。こうした育ちの大切さを保護者だけでなく幅広い世代が理解し、みんなでこどもの成長を応援しています。
また、おとなが妊娠期からいつでも必要な支援を切れ目なく受けられることで、こどもにとっても安心できる成長の環境が整っています。
また、温かい見守りの中で、こどもたちは自分自身の心と体を健やかに保つ力を、自らの意思で育んでいくことができます。

### 「今、向き合うべき現在地」

乳幼児期の愛着形成や豊かな遊び・体験がこどもの育ちにとって不可欠ですが、現在は、おとな側の様々な問題によってそれが十分に届きにくい状況が生じています。具体的には、保護者の孤立や心身の不調、周囲のおとなとの子育て知識のギャップ、保育現場の人手不足などが要因で、こどもに関わる時間や適切な関わり合いが十分に確保できていません。こどもと適切に関わることができていない保護者や周囲のおとなへの個別の支援は行われているものの、全体的な啓発はいまだ不十分な状態にあります。
また、こどもが健やかに育つためには、こども自身が規則正しい生活習慣を身につけ、心身の健康を保つことも大切です。おとなは、こどもが自分で気付き、選択し、実行していけるよう、環境を整えて寄り添っていく伴走者の役割を担うことが求められています。

### 「未来を創るためのアクション」

こどもに関わるおとなが、こどもの健やかな育ちを支えるために愛着と豊かな遊びと体験の機会確保の重要性について、様々な機会を通して普及啓発し、実践できるよう体制を整えます。
妊娠前から、妊娠期、乳幼児期、就園、就学において切れ目なく、子育て家庭の状況やニーズに合わせて支援につながることができるよう、適切な相談場所の配置、関係機関との連携強化を図ります。また、待っているだけではなくアウトリーチ等により、声を上げられないこどもや保護者が早期に支援がつながるよう、支援が必要な家庭の早期発見と深刻化の防止に努めます。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策4-2　未来をひらく力を育む学校教育を実践する

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

こどもたちは、時代に即した学びの環境の中で、自分のペースや特性に合った学びを選び、学ぶ意義を実感しながら成長していけます。互いの違いが認められ、自分らしさを大切にされることで、安心して学ぶ環境に向き合うことができます。また、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働することで、地域全体で子どもたちの学びや成長を支え、誰一人取り残されない学びが保障されるとともに、すべてのこどもが質の高い多様な学びの中で、未来を切りひらく力を身につけられます。

### 「今、向き合うべき現在地」

こどもたちが自分らしく成長できる教育を目指す一方で、現在の学校現場は多くの困難に直面しています。老朽化した施設の維持だけでなく、生成AIなどデジタル化が急速に発展する中で、ICTや多様な学びへの環境整備も不可欠となっています。学びの質においても、学習意欲の低下や家庭環境による格差、教職員の多忙による組織力の停滞が懸念されます。また、多様性の尊重が知識に留まり行動に結びつきにくい現状や、特別支援教育の需要増加に伴う専門性向上への対応も急務です。これらの解決には、行政内部や、家庭や地域と行政との横の連携を深める必要があります。
そして、これらの様々な教育課題に対し、これからの学校教育はどうあるべきか、こどもたちにより良い教育環境を提供するにはどのような取組が必要なのか等について、「これからの学校の在り方」を具体的に検討していく時期を迎えています。

### 「未来を創るためのアクション」

質の高い学びと多様な環境で育つこどもを包み込む教育を実現するため、実効性のある施策を推進します。そのために、高知市のこれからの学校の在り方に関する方針を定め、取り組んでいきます。
まず、施設整備においては、安全対策や多様な学びへの対応など、時代に即した環境を整えることに加え、「将来の教育像を見据えた更新」を進めます。学習面では、個別最適な学びや探究学習、多様性への理解を深める対話型の学びへの転換を図るとともに、学習支援、生活困窮支援、スクールソーシャルワーカーの活用といった福祉との連携等を進めます。教職員に対しては、研修の充実や専門的な助言・支援、特別支援教育に関する知識や指導力の向上に取り組みます。また、県下唯一の市立高校である高知商業高等学校では、学校の特色化を通じて教育の質を高めます。
さらに、行政や地域等のリソースを有効に活用しながら、学校と地域等の関係者が連携した重層的なサポートによって、一人一人に寄り添う教育環境を築いていきます。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## 施策4-3　こども・若者の権利が守られ、安心できる居場所を創る

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

こどもも若者も、暮らしのすぐそばに、安心して自分らしくいられる居場所を持っています。そこには見守り、さ支えるおとながいて、地域による差はありません。障害や発達の特性のあるこども、医療的ケアを必要とするこども、家庭や学校で安心して過ごすことが難しいこども、それぞれが必要な支援を受けながら、自分に合った場所で安心して過ごしています。学校を離れたあとも、気軽に立ち寄り、人とつながれる場があります。誰もが、自ら遊び、学び、やりたいことに挑戦しています。

**「今、向き合うべき現在地」**

放課後や日常生活を安全・安心に過ごし、自分らしくいられる居場所の確保は重要ですが、共働き世帯の増加等により需要が高まる一方、支援員の高齢化や担い手不足などから、地域によって受け皿や見守り体制に差が生じています。また、障害のあるこどもや医療的ケアを必要とするこどもへの専門的な対応や、家庭で安心して過ごすことが難しいこども、学校に馴染みにくいこども・若者への支援も課題となっています。さらに、学生でない若者についても、ひきこもりや社会とのつながりの希薄化、孤立などが課題となっており、安心して過ごし、相談や交流を通じて人や社会とつながることのできる居場所が求められています。加えて、地域活動の場や指導者の不足、経済的な格差などにより、こども・若者の主体的な活動への参加機会にも差が生じています。

**「未来を創るためのアクション」**

こども・若者が「ここにいたいと思える」・「安心できる」多様な居場所の確保と、地域や社会とのつながりを支える環境づくりを進めます。
市の施設や図書館等の社会教育施設、地域資源を活用するとともに、オンライン空間を含めた多様な居場所づくりを進めます。また、地域福祉コーディネーター等を中心に関係機関等との連携を促進し、居場所同士のネットワーク化や担い手の確保・育成を図ります。さらに、不登校、発達障害、ひきこもりなど、個々の状況に応じて必要な支援につながる体制を整えるとともに、「高知くらしつながるネット」等を活用した情報提供を充実させます。加えて、こども・若者自身の意見を居場所づくりに反映し、地域活動や体験活動等への参加機会を広げます。放課後児童クラブ等については、受け皿や支援人材の確保を図るとともに、一人一人の状況に応じた支援の充実を図ります。また、教育、福祉、保健、医療、就労等の関係機関や地域・民間団体との連携を強化し、必要な支援につながる仕組みを整えます。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策4-4　自分らしい未来をデザインするための教育・啓発を展開する

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

こどもや若者が、生きることや働くことの意味を深く理解し、自分の心と体を大切にしながら、人生のそれぞれの段階へ歩みを進めることができます。自分の興味や関心、強みを生かして進学や就職などの進路を選び、地元でも離れた場所でも、どこにいても力を発揮し活躍できます。若い世代が、ふるさと高知に愛着と誇りを持ち、地域とのつながりを感じながら、希望を持って未来を思い描くことができます。

**「今、向き合うべき現在地」**

予測困難な時代とされる昨今、正解のない問いに立ち向かい、変化に応じた自らの未来を主体的に切りひらく力が求められています。こうした中、学ぶことと自己の将来とのつながりが見い出せず、学習意欲の低下や学習習慣が定着しないという課題も指摘されており、社会的・職業的自立に向けて必要な資質・能力を育成するキャリア教育を充実させる必要があります。また、高校卒業までに、キャリアデザインを考え、学ぶ機会がまだ十分でなく、地元や地元企業の多様な魅力や選択肢も、若者や保護者に十分伝わっていない現状があります。ステレオタイプな就職イメージも根強く、人口減少や若者の県外流出が進む中、企業と若者とが接点を持てる仕組みづくりも必要です。

**「未来を創るためのアクション」**

学ぶこと・働くことの意義や価値、自らの役割や生き方について考え、こども・若者が自らの力で未来を切り拓けるよう、学びの環境を整えます。
また、高知の魅力や課題への理解を深める機会を創出するとともに、早い段階から地元企業の魅力や多様な働き方、支援制度等の情報を分かりやすく情報発信することで、自分に合った選択ができるよう支援します。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## 施策4-5　こども･若者の声を尊重し、活躍できる地域社会を創る

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

こども・若者が「社会のまんなか」として尊重され、自らの権利を理解し、高い自己肯定感を持って未来を切り拓いています。社会全体がこどもたちの視点を大切にし、誰もが幸福を実感できる社会が実現しています。

**「今、向き合うべき現在地」**

近年の法整備や社会の関心の高まりにより、こどもの尊厳や基本的人権への理解は着実に浸透しつつあります。しかしながら、当事者であるこどもたちの自己肯定感の向上や、自身の意思を表明する機会の確保、さらにはその多様な意見を実際の社会づくりに反映させる具体的な仕組みづくりは、いまだ多くの課題を残した途上段階にあります。

この現状の背景には、意思決定の多くがおとなの都合や視点で進められてしまう、おとな中心の社会構造があります。こうした構造から脱却し、こどもの権利が真に守られる社会を実現するためには、一部の関係者だけでなく、全世代を巻き込んだ地道な啓発活動と、社会全体の意識改革を行うことが求められています。

**「未来を創るためのアクション」**

こどもや若者一人一人が持つ大切な権利を広く伝える取組と、社会全体の意識改革を同時に力強く進めていきます。

そのための一歩として、若い世代が自ら考え発言できる「こうち志議会」やワークショップを積極的に開催します。そこで集まった純粋な意見をただ聴くだけで終わらせず、実際のまちづくりに反映し、さらに「どのように活かされたか」をこどもたちへ丁寧にフィードバックする循環をつくります。

こどもや若者の声が社会を動かす実感こそが、本人の自己肯定感を育み、幸福度の向上へとつながります。おとなの都合で決める社会から、こども・若者が主役として輝ける社会を実現します。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## しあわせの柱５　つながりと愛着で心地よい、しあわせが寄り添う暮らし

| 施策No | 施策名 |
|---|---|
| 5-1 | つながり、支え合う地域コミュニティを育む |
| 5-2 | ふるさとの歴史や伝統文化を次世代へつなぐ |
| 5-3 | 文化やスポーツに親しみ、彩りと交流のある環境を整備する |
| 5-4 | 移住・定住や自治体間・異業種間の連携を促進し、関係人口を拡大する |

### しあわせの柱5に含まれる主な分野

5-1　住民同士のつながり活性化、NPO・ボランティア活動の推進
5-2　歴史・文化の継承、文化財保護
5-3　文化活動・芸術活動の促進、科学・学術文化の振興、スポーツ振興
5-4　移住・定住促進、関係人口の創出、自治体間連携、産学官民連携

# しあわせの柱5　つながりと愛着で心地よい、しあわせが寄り添う暮らし

## 未来の暮らしの姿

日々のスポーツや文化、まちづくり活動を通じて心身ともに健やかに過ごし、高知市特有の歴史や祭りを誇りに感じながら、次世代へと大切に引き継いでいます。地域の中では、住民同士が「支え、支えられる」豊かな関係性が築かれ、新しい人流や移住者との出会いが日々の暮らしに刺激と彩りを与えています。自然と伝統に根ざした個性が光り、誰もがこのまちに「住み続けたい」という愛着と、未来への確かな希望を持って、いきいきと自分らしい生活を送ることができます。

## 市のミッション

高知の誇りである歴史・文化資産やスポーツの魅力を磨き上げるとともに、他者を温かく受け入れる、高知市ならではの人と人とのつながりを大切に育み、誰もが心地よくつながることのできるコミュニティを構築します。地域活動の負担軽減と行政の包括的な支援により、市民が自律的に活動を楽しめる土壌を整えます。こうした「人と人との結びつきやすさ」そのものを地域の財産として磨きながら、さらに、移住・定着までを一貫してサポートすることで、市民も移住者も互いに刺激し合い、共に未来を創り出す持続可能な活力を創出します。市民をはじめとする多様な主体と行政が連携・協働しながら、地域課題に取り組み、共に支え合う社会を築きます。

| | | |
|---|---|---|
| 施策5-1　つながり、支え合う地域コミュニティを育む | 施策5-2　ふるさとの歴史や伝統文化を次世代へつなぐ | 施策5-3　文化やスポーツに親しみ、彩りと交流のある環境を整備する |
| 施策5-4　移住・定住や自治体間・異業種間の連携を促進し、関係人口を拡大する | | |

**しあわせの柱５と「分野を超えた４つの視点」とのつながり**

特に深いつながりがあるのは、「視点４. 地域の支え合いを後押しすること」です。
住民同士が「支え、支えられる」関係性や、移住者を温かく受け入れる風土を育み、地域コミュニティが義務ではなく「楽しさや誇り」を共有する場となるよう、４つのアプローチの中でも特に視点４を重視します。また、歴史や文化の継承にも地域コミュニティの存在は欠かせず、また、その継承が歴史や文化に根ざした「人と人との結びつき」にもなり高知市の最大の魅力となります。

ショートストーリー

今後の計画策定の過程で、ショートストーリーを作成していきます。
（しあわせの柱１のみサンプルを作成済）

## 施策5-1　つながり、支え合う地域コミュニティを育む

「この施策が描く未来の市民の暮らし」

人口が減る中でも、地域の活動は無理なく続き、多くの人が自分にできる形で地域に関わることができます。困ったときには、身近な民生委員をはじめ、相談できる相手や窓口があり、人とのつながりを望まない人も、さりげなく見守られています。一人一人が「支えられる」だけでなく「支える」側にもなり、互いに役割を持ち合う。人と人とのつながりと温かさが受け継がれ、誰もが安心して暮らし続けられる地域になっていきます。

「今、向き合うべき現在地」

地域の魅力であった「支え合い」の基盤が、人口減少や少子高齢化によって揺らいでいます。地域活動は、これまで培われたつながりや役割を大切にしながら維持されているものの、担い手の固定化による負担の偏りやデジタル化への対応が課題となっています。同時に、単身世帯の増加やプライバシー意識の高まりから孤立・孤独の問題が深刻化していますが、複雑な相談先の分かりにくさや人間関係の煩わしさが、新たなつながりを阻害しています。これらを支える行政や関係機関も、縦割り組織や人員・予算の不足により、住民の困りごとに十分対応しきれない限界を迎えています。

「未来を創るためのアクション」

住民同士が互いに支え合い、誰もが「支える側」にもなれる持続可能な地域運営を目指します。

市民が町内会等が行う地域の活動に無理なく関わることができるよう、これまでの活動の内容を、より負担が少なく、新規参加者の関心を引くものに見直すとともに、デジタルの活用による事務負担の軽減を図り、持続可能な地域コミュニティを形成します。また、民生委員・児童委員の活動支援や学生、企業等との連携強化により、個人の意思を尊重した「さりげない見守り」の体制を整えます。

さらに、行政の縦割りを排した組織横断的な連携を推進し、デジタル技術の活用と柔軟な組織文化の醸成を通じて、支援が必要な人のそれぞれのニーズに寄り添う包括的で効率的な支援体制を築いていきます。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策5-2　ふるさとの歴史や伝統文化を次世代へつなぐ

私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

高知が誇る豊かな歴史や伝統文化に触れることで、自分たちが暮らすまちへの誇りと愛着が深まります。先人たちが築き上げた自由民権運動の精神や郷土の歩みが、教育や日常のなかで次世代へと確実に受け継がれ、歴史ある文化財が地域の貴重な財産として大切に守られています。地域の個性が輝き続けることで、そこに住む人々が心の豊かさを感じ、未来への活力を育むことができるようになります。

「今、向き合うべき現在地」

人口減少や高齢化の影響により、地域文化や文化財の保護・伝承を支える担い手が不足し、市民の興味や関心も希薄化しつつあります。学校教育の現場では学習時間の制約から郷土史に触れる機会が限られ、自由民権運動などの重要な歴史遺産が、次代を担うこどもたちに十分に浸透していない現状があります。また、行政側も専門知識を持つ職員が不足しており、文化財の価値を分かりやすく伝え、地域活動や教育現場と効果的に結びつけていくための支援体制の強化が課題となっています。

「未来を創るためのアクション」

高知のアイデンティティである歴史文化資産を次代へつなぐため、保護・伝承活動を単なる保存に留めず、地域活動の一環として市民と共に育む体制を構築します。学校教育と連携し、自由民権運動をはじめとする郷土の歴史を分かりやすく学べる副読本や映像資料等の教材開発を継続するとともに、学芸員や司書等による出前授業等のアウトリーチ活動や自由民権記念館等の文化施設の活用を促進し、小中学生から大学生までの若い世代が地域の歩みに誇りを持てる機会を創出します。あわせて、専門職の確保・育成に努めながら、地域コミュニティの活性化と一体的に捉えた文化財保護活動の支援や、図書館における貴重資料の所蔵、高知県関係資料の収集・保存を継続することで、本市固有の文化資源が地域の魅力として永続的に守り育てられる環境を整えます。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## 施策5-3　文化やスポーツに親しみ、彩りと交流のある環境を整備する

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

日々の暮らしの中に文化やスポーツが自然に溶け込み、誰もが、時間・場所・きっかけに左右されず、心身ともに健やかで豊かな時間を過ごすことができます。安全で快適な施設の中で、知的好奇心を満たし、知や技に触れる喜びを分かち合うことで、世代を超えたつながりと心の充実が生まれます。一人一人が自分らしく学びを得ながら活動を楽しみ続けることで、そこから生まれる活気がまち全体の魅力と元気へとつながっていきます。

### 「今、向き合うべき現在地」

文化・芸術活動の分野では、活動層の高齢化が進む中、参加にかかる負担の軽減や、デジタル化などライフスタイルの変化に合わせた新しい活動スタイルの提案が期待されています。スポーツの分野では、体を動かすことが日常化している層とそうでない層の二極化が進んでいます。加えて、公共施設の老朽化や近年の暑さ対策など、誰もが安全に運動を楽しめる環境の確保が求められています。
長く親しまれてきた施設の更新時期を迎える中、これからの時代にふさわしい快適で利便性の高い環境づくりや、多様な市民のニーズを柔軟に捉えた活動のきっかけづくりが求められています。

### 「未来を創るためのアクション」

市民が文化やスポーツをいつでも快適に楽しめるよう、使い勝手の良い環境づくりを進めます。文化・芸術においては、プロの表現者との連携による質の高い鑑賞機会やアウトリーチを充実させ、市民や団体の自律的な成長を後押しする多彩な体験の場を創出します。また、科学や自然に親しむ機会についても、実物にふれる体験や観察、実演などを通じて、こどもから大人までが知的好奇心を満たせる場を広げます。
スポーツにおいては、既存資産を「スポーツ空間」として多目的に使いこなす工夫や、多彩な指導者が地域でいきいきと活動できる体制構築を追求し、　多様なパートナーと知恵を絞りながら、誰もが自分に合ったスタイルで健やかに活動を始められる仕組みを整えます。
既存の施設や資源を生かし、今の時代に合った新しいサービスを柔軟に取り入れながら、文化・芸術・科学・スポーツそれぞれの個性や相互作用を生かしながら、世代を超えた交流へとつなげます。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策5-4　移住・定住や自治体間・異業種間の連携を促進し、関係人口を拡大する

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

高知ならではの風土や人のあたたかさに惹かれ、多様な形でこのまちに関わる人々が増えることで、地域に新しい活気と彩りが生まれます。他自治体や企業、大学など、多様な主体が持つ新しい知恵や力がこのまちに結集し、市民と共に未来を創り出す喜びを分かち合っています。人と人、地域と組織がつながり、互いに刺激し合うことで、誰もが「ずっと関わり続けたい」という愛着と、進化し続けるまちへの確かな希望を持って暮らすことができます。

### 「今、向き合うべき現在地」

移住を検討される方にとって、仕事や住まい、子育て環境など、新しい生活への期待と不安が共存する中、高知市での具体的な暮らしのイメージを届ける工夫や、住まいのニーズに応えるきめ細かなマッチングが期待されています。一方で、中山間地域などにおいては、生活基盤の維持や雇用機会の確保への課題が顕在化しており、移住促進だけでなく、定住を支え続けるための多角的な施策が不可欠です。こうした課題に対し、行政単独の視点に留まらず、他自治体や産学官民が持つ多様な知恵や成功事例を結集し、地域の魅力と安心を未来へつなぐための新しい仕組みづくりが求められています。

### 「未来を創るためのアクション」

高知市に関心を持つ「関係人口」の拡大から移住後の定着までを途切れなくサポートするとともに、他自治体との広域連携や産学官民の強固なネットワークを通じて、学術的な知見や民間のアイデアを積極的にまちづくりに取り入れます。独自の体験機会の提供や戦略的な情報発信によって、高知市での暮らしをイメージしてもらい、移住後は、移住者が地域に根づくための包括的な支援を行います。多様な主体との共創による施策推進を両立させることで、移住者も住民も、そして共に歩むパートナーもが誇りを持って未来を拓いていける、持続可能なまちづくりを推進します。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## しあわせの柱６　しあわせな暮らしを支える行政

| 施策No | 施策名 |
|---|---|
| 6-1 | 人材育成と職場環境整備で組織力を強化する |
| 6-2 | 市政の見える化を推進する |
| 6-3 | デジタル技術の活用により住民サービスを高める |
| 6-4 | 持続可能な行財政運営を徹底する |

### しあわせの柱6に含まれる主な分野

6-1　人材育成、職場環境整備
6-2　広報、広聴、情報公開
6-3　DX推進、情報システム整備
6-4　財政健全化、行政改革、公共施設マネジメント、個人情報保護

# しあわせの柱6　しあわせな暮らしを支える行政

### 未来の暮らしの姿

市役所を身近な「まちづくりのパートナー」と感じ、透明性の高い情報共有を通じて納得感を持って日々の生活を送っています。デジタル技術の恩恵により、行政手続きに時間がかからなくなり、一人一人の状況に合わせた丁寧な対面サポートを受けられています。また、デジタル環境の充実により、市政に関する情報がより分かりやすく、いつでもアクセス出来る形で提供されるとともに、自分の声が市政に届き、まちがより良くなっていく過程を実感することで、このまちに住み続ける選択と、将来世代へ続く確かな安心を分かち合っています。

### 市のミッション

組織文化を「前例踏襲」から「価値創造」へと転換し、市民一人一人を柔軟に支える行政運営を確立します。DXの推進により「行かない・書かない・迷わない」行政サービスを実現し、業務の効率化によって、限られた人員でも市民の安心を支え続ける持続可能な行政サービス提供体制を構築します。データに基づく客観的な分析による効率性・有効性の検証や関係部門間の連携の強化を通じて、公共施設の配置や事業の適正化を図り、将来世代に負担を残さない持続可能な行財政基盤を築きます。同時に、職員が誇りを持って挑戦し続けられる組織づくりを進めるとともに、開かれた透明な市政運営を徹底します。

| | | |
|---|---|---|
| 施策6-1　人材育成と職場環境整備で組織力を強化する | 施策6-2　市政の見える化を推進する | 施策6-3　デジタル技術の活用により住民サービスを高める |
| 施策6-4　持続可能な行財政運営を徹底する | | |

ショートストーリー

今後の計画策定の過程で、ショートストーリーを作成していきます。
（しあわせの柱１のみサンプルを作成済）

## 施策6-1　人材育成と職場環境整備で組織力を強化する

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

市役所に意欲ある人材が集まり、学びと挑戦を通じて成長し続ける組織になっています。職場の上司や先輩職員がしっかりと後進を導き、これまでに培ってきた知識や技術が次世代へと確実に受け継がれていきます。職員が安心して働くことができる職場環境は、事務リスクを抑え、行政サービスの質を将来にわたって維持・向上させていきます。市政を支える職員が生き生きと力を発揮することで、市民の暮らしが安定して支え続けられます。

### 「今、向き合うべき現在地」

将来にわたって質の高い行政サービスを提供するためには、継続的な人材の確保と育成が不可欠ですが、少子化の進展や生産年齢人口の減少により、将来を担う人材の確保は年々厳しさを増しています。
職場においては、複雑・多様化する行政課題に対して、知識や技術の継承を十分に行う体制が整わないことや、管理職のマネジメント領域の拡大と、過重な責任から登用を望まない職員の増加など、次世代リーダーの育成や知識・技術の継承が課題となっています。
人員不足の中で業務量が増大し、多様な働き方を支える体制も不十分なままでは、職員の疲弊がサービスの質に影響を及ぼすことが懸念されています。

### 「未来を創るためのアクション」

優れた人材を確保し、職員一人一人が挑戦し続けられる持続的な組織を築きます。まず、機動的な採用試験の実施と公務の魅力発信により、高い意欲をもった人材を呼び込みます。また、社会の変化を敏感に捉え、地域課題の解決に向けて粘り強く取組を進めることができる人材を育成するとともに、採用や研修を通じて技術職員を育成することで、次世代への技術継承を進めます。あわせて、成果や貢献を適切に評価し処遇へ反映する人事給与制度を確立します。
管理職については、組織的なバックアップや処遇改善を通じてその魅力を再定義し、次世代リーダーを支える仕組みを充実させ、やりがいを持って働く管理職が部下を導くポジティブなサイクルを創出し、組織の活力を高めます。さらに、長時間労働の是正や柔軟な働き方の推進により、多様な職員が安心して能力を発揮することができる職場環境を整えることで、将来にわたって質の高い行政サービスを提供し続けます。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策6-2　市政の見える化を推進する

### 私たちが目指す「未来の暮らしの姿」

市政の判断プロセスが明確に示されることで、市民は安心と納得感を持って行政と向き合うことができるようになります。それぞれの施策が自分の暮らしにどのように関わるのかが見え、まちづくりのビジョンを市民と職員が共有することで、誰もが当事者として地域に関わっていくことができる環境が整います。知りたい情報がスムーズに届き、寄せられた声には丁寧な説明が返ってくることで、的確で分かりやすく開かれた市政が日々の暮らしを支えます。

### 「今、向き合うべき現在地」

社会環境の変化等により市民ニーズやまちづくりにおける課題が多様化するとともに、人口減少や災害対応といった分野横断的な案件が急増し、高度な調整と情報収集に多くの時間を要しています。また、行政が進める施策が市民にとって自分たちの暮らしとの関わりが見えにくく、庁内でも施策の目的や役割が十分に共有されていないことも課題です。情報の発信においては、市民と行政が双方向に「伝わる」仕組みとして「キャッチボール型広聴・広報」を推進していますが、情報発信そのものを目的化し、意思決定の背景やプロセスが市民に伝わりにくい面があるほか、SNSなどのデジタル媒体の活用不足や、情報公開・相談対応における判断のばらつきも、市民の安心感や納得感を得る上での大きな壁となっています。

### 「未来を創るためのアクション」

市政を的確かつ円滑に運営するとともに、意思決定の過程を市民に分かりやすく伝える、対話を通じた「開かれた行政」を実現します。
まず、部局間の情報共有と円滑な意思疎通により組織的な連携を高め、意思決定過程を市民へ分かりやすく説明することで、行政の透明性を高めます。
また、市の行政計画によって各施策が市民生活にどのように貢献しているのかを分かりやすく伝え、市民が当事者としてまちづくりに参画できる環境を整えます。情報の発信においては、全職員が情報を届けたい相手を見極めながら、デジタル媒体等の活用と伝わる工夫を徹底します。市民からの声には判断の背景を丁寧に説明して誠実に応え、その声を確実に市政へと反映させます。
さらに、情報公開については、請求によらず自ら発信する姿勢へと転換し、オープンデータの拡充や利便性の高い閲覧システムの構築を通じて、市民との情報共有をより一層深めていきます。
また、相談対応や情報公開に関する共通ルールを共有することで、判断基準の平準化を図り、対応のばらつきを解消します。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

## 施策6-3　デジタル技術の活用により住民サービスを高める

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

時間や場所に縛られず、自分のライフスタイルに合わせて誰もがスムーズに行政とつながり、手続を楽に行うことができる暮らしになっています。
スマートフォン等からのオンライン申請や手数料等のキャッシュレス決済、証明書のコンビニ交付などのデジタルサービスの充実により、「行かない・書かない・迷わない」が可能となります。デジタル環境の整備が行き届くことで、市民はストレスなく行政サービスにアクセスすることが可能になるとともに、デジタルの利便性と対面の温かさを両立させ、行政サービスの満足度を将来にわたって高めることで、便利さと安心を同時に実感できる生活を送ることができます。

**「今、向き合うべき現在地」**

行政手続のためには開庁時間中に市役所へ来庁しなければならず、市民と市の窓口との接点が限られているため、来庁する移動時間や窓口での待ち時間等により、市民の貴重な時間が失われています。デジタル化の遅れにより、手続の簡素化や待ち時間の削減、対面サービスの質の向上といったデジタル化によるメリットを市民が十分に実感できていない現状があります。行政サービスのデジタル化を段階的に進めることで、こうした課題の解決につなげる必要があるとともに、デジタル機器に不慣れな方を含め、誰もが簡単に、安心してデジタル化の恩恵を受けられる仕組みづくりが急務です。

**「未来を創るためのアクション」**

デジタル技術を効果的に活用し、市民に質の高いサービスを提供します。
申請時の記入や待ち時間の負担を軽減するとともに、一箇所で手続が完結するワンストップ窓口の仕組みを土台に、来庁不要で手続できるオンライン申請の拡充や地域拠点での取扱い業務の拡大等を図るなど、市民にとって使いやすいサービスや環境を整備し、手続改革を進めます。デジタル技術を活用した定型業務の自動化などにより、職員数が減少する中でも持続可能な行政サービスの提供体制を構築するとともに、より質の高いサービスの提供に向けて、新しいデジタル技術を取り入れながら、市民一人一人の満足度向上に努めます。また、職員がＡＩ等の最新技術を業務に活用することで、手続の迅速化と正確性を高め、安心・便利に利用できる市民サービスを追求します。

「関連する他の「柱」の施策」

施策
施策

## 施策6-4　持続可能な行財政運営を徹底する

**私たちが目指す「未来の暮らしの姿」**

限られた財源や資産を、市民のしあわせにつながる分野に効果的に使える、信頼と納得感のある市政が実現します。
行政運営の透明性が高まり、自分たちのためのサービスが将来にわたって続いていくという安心感を持てる環境が整います。

**「今、向き合うべき現在地」**

社会情勢が変化し、課題が複雑化する中で、従来の縦割り組織や前例踏襲といった手法では迅速な対応が難しくなっています。
高知市役所を取り巻く状況として、財政面では、高齢化の進展に伴う扶助費の増加や、過去の事業で活用した公債費が財政の硬直化を招いており、加えて、公共施設の老朽化対策や近年の物価高騰が追い打ちをかけており、全ての事業を従来どおりに維持することは困難な状況です。また、デジタル化の進展に伴い、個人情報や行政情報の適切な管理・運用の重要性が一層高まっています。
また、将来を見据え、行財政運営を持続可能なものとしていくためには、行政だけでなく、地域コミュニティとの協働を継続していくことも課題となっています。

**「未来を創るためのアクション」**

効率的で持続可能な行財政運営を確立します。
まず、事務ミスや情報漏洩等のリスクを最小化するよう、リスク管理を徹底するとともに、業務プロセスや組織体制を抜本的に見直すことにより、最少の資源で最大の効果を挙げる効率的な業務体制を構築し、住民サービスの質の向上や住民の利便性向上につなげます。また、組織文化を「前例踏襲」から「価値創造」へと転換し、市民のニーズを柔軟に捉えながら「まちづくりのパートナー」としての役割を果たします。
さらに、財政面では、事業のスクラップ・アンド・ビルドと公共施設のマネジメントを徹底し、将来世代に負担を残さない持続可能なサービス基盤を構築します。
これらを通じて、安全性と確実性を大前提に、限られた資源を最大限に活用し、持続可能な行政サービスの提供に努めます。

「関連する他の「柱」の施策」

**今後の計画策定の過程で、関連する他の柱の施策を選定していきます。**

# 第４章　計画の構成等

## 1　計画の構成

高知市総合計画は、「高知市未来ビジョン」と「実施計画」の２つで構成しています。

・　高知市未来ビジョン

高知市未来ビジョンは目指す未来像や未来像を実現するための方向性、実現に向けた施策を示すものです。

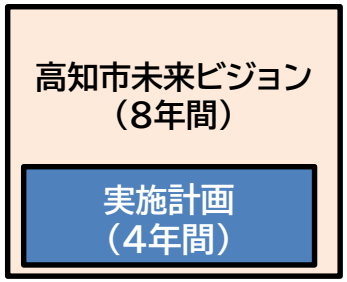
【期間】８年間　（令和９年度から令和16年度まで）

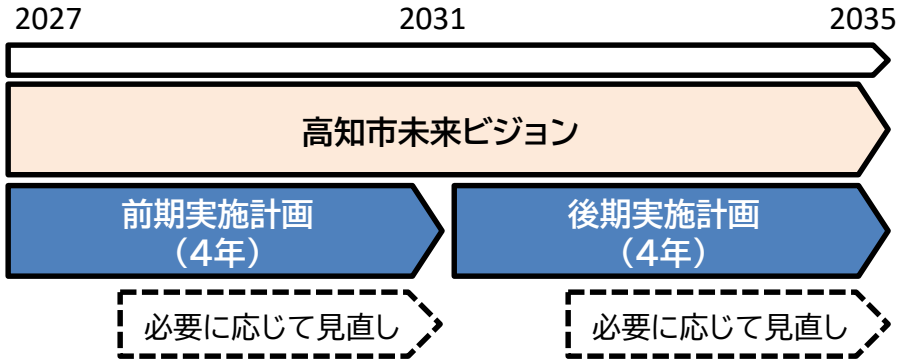
・　実施計画

実施計画は高知市未来ビジョンで示した施策を実現するための具体的な取組（事業）を示すものです。

【期間】４年間（前期４年、後期４年）

※必要に応じて見直しを実施




## 2　計画の位置付け

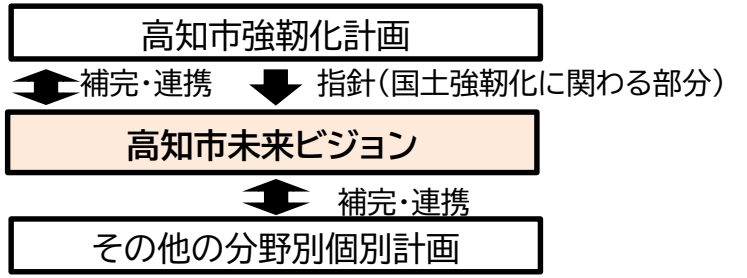
高知市未来ビジョンは、理想の未来像や、実現に向けての取り組みの方向性などを示すまちづくりの羅針盤です。

・　分野別個別計画との位置付け

本市が策定している様々な分野別の個別計画は、本ビジョンが掲げる未来像と方向性の整合を図りながら、分野別の詳細な方針や取組を示します。

（高知市強靭化計画の国土強靭化に関わる部分については、高知市未来ビジョンを含む各種行政計画の指針となるアンブレラ計画として位置付けられています。）

※アンブレラ計画…特定の部分に関しては全ての他の計画等の上位に位置付けられ、様々な分野の計画等の指針となる性格を有する計画のこと。




## 3　計画の進行管理

計画で目指す未来像の実現を測定するため、６つの「しあわせの柱」に紐づく各施策に対して、市民にとって「実際の生活や人生に起きた変化・成果」を測定する「暮らしの実感項目」を設定します。

これら「暮らしの実感項目」は市民意識調査により、計画初年度の令和９年度から調査を開始し、令和９年度の調査結果を基準値として、令和10年度に改めて目標値を設定します。

また、個別行政計画などに設定されている、既存の目標値の達成状況などを活用し、市民実感のみでなく、客観的な指標の調査もあわせて行い、多面的に現状分析を実施します。

さらに、実施計画において事務事業評価制度による重要業績評価指標（ＫＰＩ）を設定すること等により、登載事業の状況を把握し、ＰＤＣＡサイクルによる進行管理を実施します。

実施計画は必要に応じて見直しを行い、実効性のある進行管理を行います。

## （仮）暮らしの実感項目（ビジョン達成に向けた柱ごとの成果指標）

・６つのしあわせの柱に紐づく施策に対応するような質問項目を、それぞれの柱に設定（２～４問程度を想定）

| ６つのしあわせの柱 | 暮らしの実感項目（例） | 目標 |
|---|---|---|
| 安心と快適が守る、しあわせな暮らし | 地震や台風などの災害時にも、自身の安全が確保できると感じますか。 | ↑ |
| | 病気やけがをした時に、必要な医療を安心して受けられると感じますか。 | ↑ |
| | ごみの分別・減量や節電など、環境に優しいことを行っていますか。 | ↑ |
| | 道路、公園、水道などのインフラや住居周辺の生活環境は整っていると感じますか。 | ↑ |
| まちの活気と共に、元気としあわせを育てる暮らし | 地域の産業（農林水産業、産業、観光など）は今後発展すると感じますか。 | ↑ |
| | 中心市街地、街路市や商店街は賑わっていると感じますか。 | ↑ |
| | 観光客にとって、魅力のある地域だと感じますか。 | ↑ |
| 誰もが認め合い、自分らしいしあわせが見つかる暮らし | あなたの個性や価値観は周囲に認められていると感じますか。 | ↑ |
| | 性別・国籍・障がいの有無に関わらず、誰もが尊重されていると感じますか。 | ↑ |
| | 高齢の方や障がいのある方が暮らしやすい環境だと感じますか。 | ↑ |
| こども・若者が、しあわせな未来を描ける暮らし | 子育てがしやすい環境だと感じますか。 | ↑ |
| | 子どもや若者が学校や地域での学習機会を得ることができていると感じますか。 | ↑ |
| | 子どもや若者の意見が尊重され、居場所があるまちだと感じますか。 | ↑ |
| つながりと愛着で心地よい、しあわせが寄り添う暮らし | 地域に属し、近所の人や地域とのつながりがあると感じていますか。 | ↑ |
| | 文化・芸術・スポーツ活動を通じて、人とのつながりや心の充足を感じていますか。 | ↑ |
| | 高知市を「ふるさと」と感じ、高知市民であることに誇りを持っていますか。 | ↑ |
| しあわせな暮らしを支える行政 | 市役所の政策や事業について、わかりやすい情報が提供されていると感じますか。 | ↑ |
| | オンライン申請などのデジタルサービスで、行政手続が便利になったと感じますか。 | ↑ |